

2014.11.8

2014年のクラシック音楽界を振り返って
◆没後150年マイアベーア ◆3人の名指揮者を偲んで
◆生誕100年伊福部昭 ホクウツド/フリュベック・テ・ブルゴス/ホルヴァート

プログラム

2014年も残すところ2ヶ月を切りました。今日は少し早いのですが、これまでご紹介出来なかったアニヴァーサリー作曲家、今年亡くなった名指揮者達をまとめてご紹介することにしました。

マイアベーアはドイツで生まれ、フランスで成功した19世紀前半に全盛を極めた“グランド・オペラ”最大の作曲家。グランド・オペラとは大編成のオーケストラと合唱、バレエの導入、独唱と合唱を混合させた劇的場面の設定、通常5幕とする事、歴史的性質の悲劇が主題となっている事などが特徴で、“予言者”はマイアベーアの最高傑作です。**伊福部昭**というと“ゴジラの作曲家”だけで済ませがちですが、アイヌ音楽や日本の民俗音楽を研究し、土俗的色彩の強い作品を数多く残した我が国を代表する作曲家です。映画“ゴジラのテーマ”は実は、ヴァイオリン協奏曲で現われるテーマを転用したものです。1950年に初演され、大成功を収めた「プロメテの火」はその後、長年行方不明になっていたオーケストラの総譜が2009年に発見され、2013年半世紀ぶりに復活上演された名曲です。**クリストファー・ホクウツド**（1941.9.10～2014.9.24）はイギリス出身で、1973年にエンシェント室内管弦楽団を設立、古楽器によるモーツァルトやハイドンでは新鮮な響きで聴衆を魅了しました。一方でモダン・オーケストラにも積極的に客演、バロックから近代作品まで、独自の視点からの演奏は注目に値します。**ラファエル・フリュベック・テ・ブルゴス**（1933.9.15～2014.6.11）はスペインのブルゴス生まれ。スペイン音楽の第一人者として評価されてきましたが、ドイツ、イタリア、フランス、ロシア音楽まで幅広いレパートリーを持ち、知的な叙情性と情熱とが程よくブレンドされた響きは魅力に溢れていました。**ミラン・ホルヴァート**（1919.7.28～2014.1.1）は旧ユーゴ、クロアチアの指揮者で、1990年にスロヴェニア・フィルを振ったマーラー「復活」の名演が、一部のファンの間で話題となり、一躍その名が知られるようになりました。しかし、1969年から1975年まで常任を勤めたオーストリア放送交響楽団（現ウィーン放送響）との実績が示すように実力は第一級で、常に引き締まった、スケールの大きな音楽と品格のある繊細な音楽とのバランスが絶妙でした。忘れられない名指揮者のひとりです。

ジャコモ・マイアベーア (1791～1864):

**歌劇“予言者”～第2幕 ああ、わが子よ／第3幕 バレエ音楽“スケートをする人々～ワルツ
第3幕 祈りの歌～勝利の賛歌／第4幕 戴冠式行進曲**

ブラシド・ドミンゴ(テノール)/アグネス・バルツァ(メゾ・ソプラノ)

マルチエッロ・ヴィオッティ指揮ウィーン国立歌劇場管弦楽団/ウィーン国立歌劇場合唱団
(2000.12.7 ウィーン国立歌劇場でのLive)

セルゲイ・プロコフィエフ (1891～1953):

交響曲第1番ニ長調op.25 “古典交響曲”

クリストファー・ホクウツド指揮NHK交響楽団
(2009.9.25 サントリーホールでのLive)

モテスト・ムソルグスキー (1839～1881)～ラヴェル編曲:

組曲“展覧会の絵”～フロムナード～小人～古城～カタコンブ～ババ・ヤーガの小屋～キエフの大門

ラファエル・フリュベック・テ・ブルゴス指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団
(1978.6.29 ミュンヘン、ヘルクレス・ザールでのLive)

*** 休憩 ***

伊福部昭 (1914～2006):

ヴァイオリンと管弦楽のための協奏風狂詩曲(ヴァイオリン協奏曲第1番) <1948/1971>

久保田巧(ヴァイオリン)

井上喜惟指揮アルメニア国立フィルハーモニー管弦楽団
(1993.10.3 アラム・ハチャトゥリアンホールでのLive)

バレエ音楽“プロメテの火”～抜粋

広上淳一指揮東京交響楽団

(2013.6.1 ミューザ川崎シンフォニーホールでのLive)

クスタフ・マーラー (1860～1911):

交響曲第8番変ホ長調“千人の交響曲”～第2部 後半

ミラン・ホルヴァート指揮ベルリン交響楽団/ベルリン放送合唱団/ベルリン放送児童合唱団

マグダレーナ・ハヨシヨヴァ(ソプラノ)/ビルギット・フィニシ(アルト)/ウエルナー・ホルヴェーグ(テノール)他
(1987.4.23 シャウシュピールハウスでのLive)